

「すべての教員」「全教科・領域」で取り組む

第3期

泉大津市 学力向上プラン

～ 小・中学校における 確かな学力の育成 ～

～ 教職員の資質・能力の向上 ～

令和8年4月

泉大津市教育委員会



はじめに

学校教育において、「主体的・対話的で深い学び」の視点を重点とした学習指導要領が、令和2年度(小学校)と3年度(中学校)から全面実施となっています。そこで泉大津市では、学習指導要領に基づき、第2次泉大津市教育振興基本計画を推進しています。



第2次泉大津市教育振興基本計画
<https://www.city.zumiotsu.lg.jp/material/files/group/37/kyouikuikaiku.pdf>

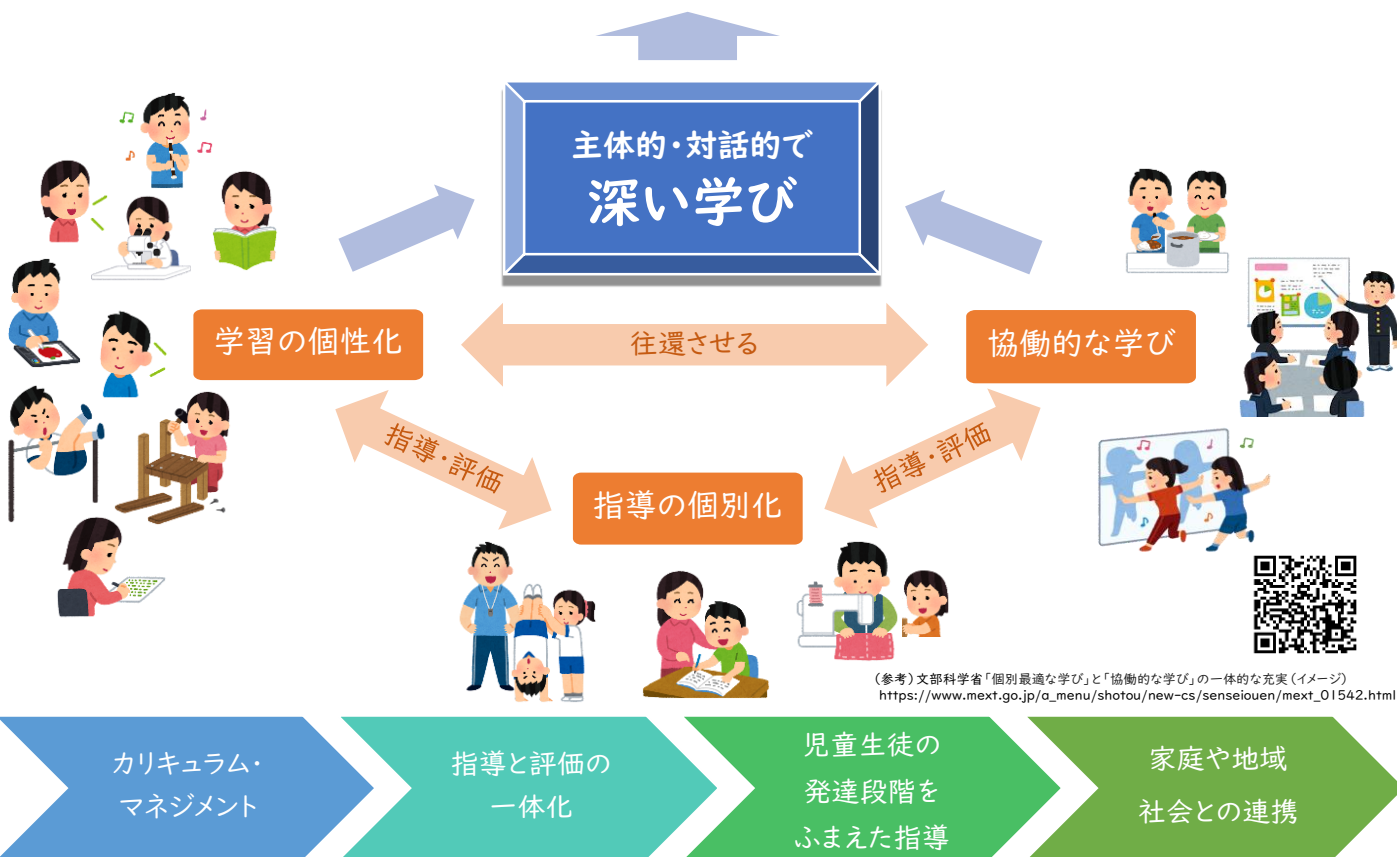
以下は、学習指導要領に関する指導資料のイメージ図です。

義務教育としての目標

生きる力 資質・能力の育成



(参考) 文部科学省HP <https://www.youtube.com/watch?v=wc8VdrwQMBs>



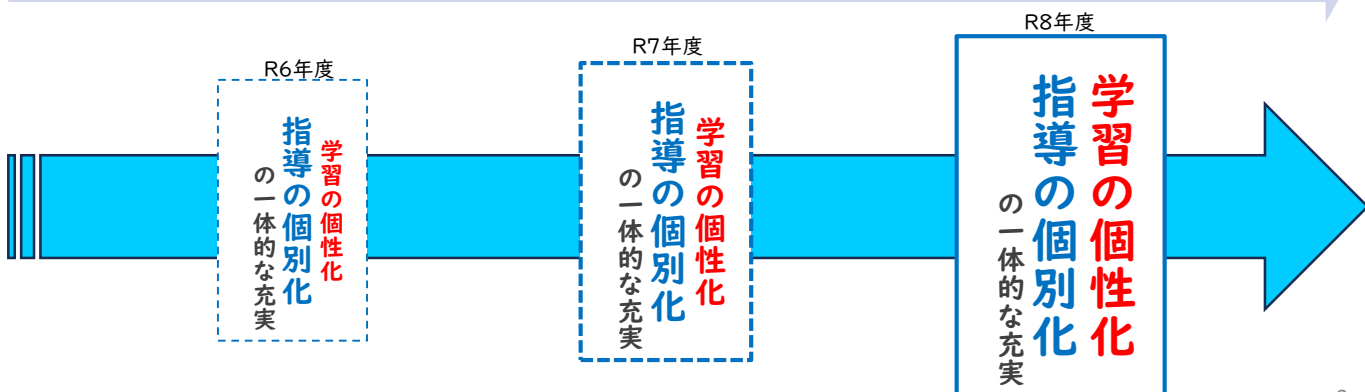
(参考) 文部科学省「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実(イメージ)
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/senseiyouen/mext_01542.html

計画の位置づけ

泉大津市では、この学力向上プランを次のためのものと位置づけ、令和6~8年度で実施します。

「教職員の資質・能力の向上」

「確かな学力の育成」



「学力向上プラン」3カ年計画の目標

①教師の分析力向上 ②教師のRSの視点の獲得 ③子どもの自学力向上

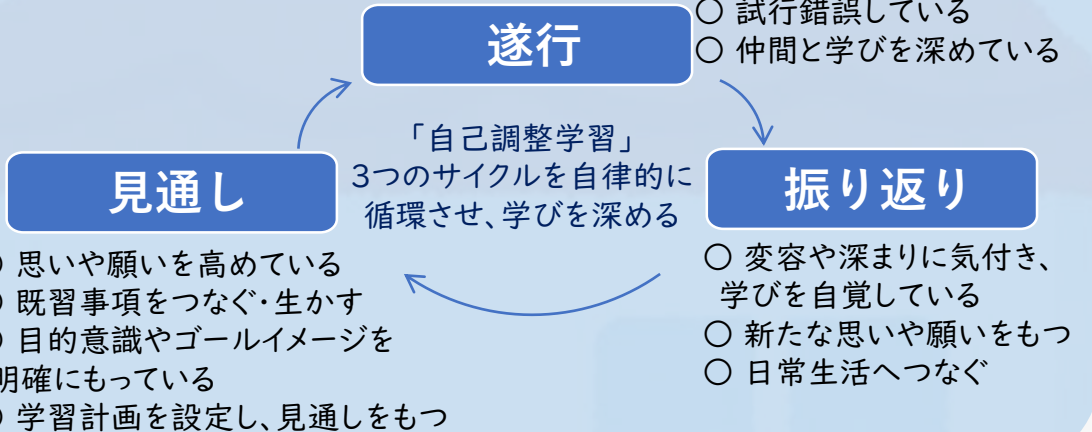
指標 ○学習意識調査 ○全国学力・学習状況調査の通過率、正答率及び解答類型への反応率、質問紙結果

自律した学習者を育てるということ



令和7年12月15日
教育課程部会
総則・評価特別部会
資料1-1

○自己調整学習のサイクル



○自己調整学習の効果を高める方略の例（学習成果に繋がりやすくする）

動機づけ方略

学習方略

メタ認知方略

○方略の指導に関する類型（子どもたちの工夫・発揮を支える）

直接的な指導

間接的な指導

学習環境設定の工夫

R6からのプランの二本柱

学調（問題・結果）分析
からの授業改善

リーディングスキルの視点
からの授業改善

○授業づくりや各校の研究の土台として大切にしてきたこと

分析のプロセスを授業に生かすということ

- ・ 題材や問題の問い方を参考に、単元のパフォーマンス課題や発問を設定してみる
- ・ 解答類型や反応率、S-P表等から、授業における押えどころを把握し、一人ひとりに正しい理解を促す
- ・ 長期的な基礎の取組みや教科横断的な取組み等の効果の検証方法として位置づけ、取組みを改善する 等

子ども理解に基づき、言葉にこだわるということ

- ・ 読めるかな？ わかるかな？ 伝わったかな？ と必要に応じて批判的に教材研究や授業の進行を行う
- ・ 意味理解を促進するための音読・視写・聴写を取り入れてみる
- ・ 教科書の読み方（図と本文の対応付け等）や学習言語にこだわり、助詞の扱いに注意して、言い換えや図示を取り入れてみる 等

教師による自己調整学習の促進の例

動機づけ方略

質の高い学習を開始・継続できるように、自らの動機づけ(モチベーション)や感情を整える

学習課題の 意義づけ・価値づけ

目標に照らし合わせて努力に見合う価値があると実感する

学習環境の調整

自分自身が集中できる環境を整える

他者との 協働や支援の活用

友だちに聞く、協働する、教師や保護者の支援を求めるなど、社会的リソースを整える

自己肯定感の維持

成果の要因を「自ら変えられる内的要因(方略等)」で捉えさせる

意思や注意の コントロール

関係のない思考を抑え、注意を振り向ける

学習方略

学習内容をよりよく理解し、定着させることができるよう学習中の情報処理の方法等を工夫する

反復方略

長期記憶として定着するまで、繰り返し学習できるようにする

精緻化方略

理由や意味を付け加えるなど、新たな学習内容を、既存の知識と関連付けて深く理解できるように工夫する

組織化方略

同じ点に着目して情報を整理する、内容を要約するなど、新たな学習内容の中で関係づけを行い、体系的に理解できるように工夫する

メタ認知方略

学習方略がうまく働きよりよい学習成果に結びつくよう、自身の学習過程の計画・把握・調整・振り返り等を適切に行う

計画方略

学習活動に先んじて、計画、目標設定、方略の選択を行う

モニタリング方略

学習過程で理解度を自分に確認し、進捗を確認する

評価方略

終了後、進捗を当初の目標と照らし合わせる

調整方略

進捗状況に応じて自身の方略等を調整する



令和7年12月15日
教育課程部会
総則・評価特別部会
資料1-1

○方略の指導に関する類型(子どもたちの工夫・発揮を支える)

直接的な指導

「～しましょう」等の形で発揮させたい方略を直接的に指導

間接的な指導

「～したいときはどうすればよいか」等の形で、方略を間接的に気づかせる

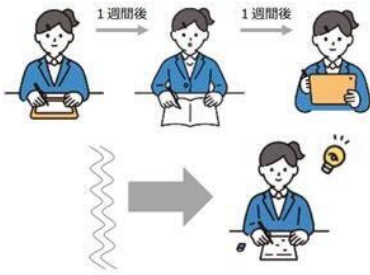
学習環境設定の工夫

教師による指導は行わず、子ども自身が自然と方略を工夫するような学習環境を整える



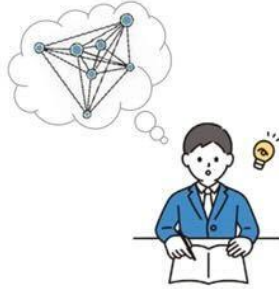
分散学習

時間の間隔を空けて復習することで、長期的に学習内容を定着しやすくする



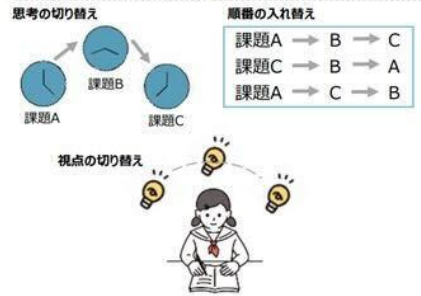
検索練習

学習内容を積極的に思い出す練習をする事で、記憶の定着と新しい状況での応用につながる



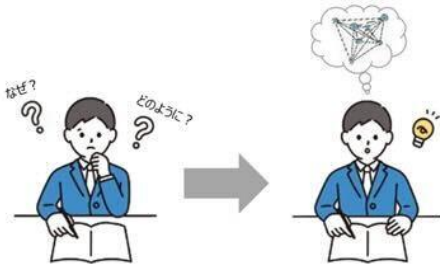
交互配置 (インターリーブ)

同じような問題を解き続けるのではなく、トピックを切り替えながら学習する



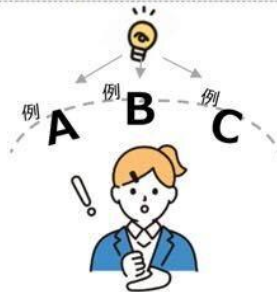
精緻化

理由や意味など、学習している内容に情報を加えて深く、多角的に理解する



具体化

抽象的な概念を学習する際、具体的な例を用いて説明する



二重符号化 (デュアルコーディング)

言語的な情報と視覚的な情報を組み合わせることで、情報を思い出しやすくする



(Weinstein et al. (2018) で挙げられている、研究上一貫して良い効果が見られている6つの効果的な学習方法について、「認知心理学者が教える最適な学習法ビジュアルガイドブック (東京書籍)」を参考に文部科学省作成)

自己調整学習の区分

自己調整の段階	自己調整学習の区分	
	自己調整が不十分な学習者	自己調整ができている学習者
見通し	<ul style="list-style-type: none"> ・目標があいまいで、遠い、系統的でない ・学ぶことへの自信のなさ ・弱い興味／学ぶことに意義を感じない ・外発的動機づけ(賞罰による) ・学び方(プロセス)がわからない 	<ul style="list-style-type: none"> ・目標が明確、近い、階層的 ・学ぶことに自信がある(=自己効力感) ・強い興味／学ぶことに意義を見いだす ・内発的動機づけ(好奇心、楽しさ) ・学び方(プロセス)がわかる
遂行	<ul style="list-style-type: none"> ・プラン(計画)が定まらない 何からしたらよいか・・・? ・結果だけに注目してしまう とにかく答えを書けばよい ・セルフ・ハンディキャップ できないことの言い訳をさがす 	<ul style="list-style-type: none"> ・明確なプランに従って実行できる ・解き方や学び方(プロセス)に注目する (=自己モニタリング) ・うまく自分を導いている (=自己指導, 自己対話) ・深い注意集中
振り返り	<ul style="list-style-type: none"> ・自己評価を避けようとする ・不満感を感じている ・成功や失敗の原因を 「外のこと」のせいにする →運が悪かったから、課題が難しすぎたから… ・学習を避けようとする 	<ul style="list-style-type: none"> ・積極的に自己評価をする ・満足感を感じている(自己反応) ・成功や失敗の原因を 「自分のこと」のせいにする(原因帰属) →努力したから、学習方法が良かったから… ・さらに学ぼうとする(適応的)

年間スケジュール

4月

全国学力・学習状況調査（小6・中3）

小学生すくすくウォッチ（小5・小6）

問題分析から授業改善へ

6月

- ・「全教員」が、問題を解く
- ・「全教員」が、「分析の視点」に基づいて問題分析を行う
- ・「全教員」で、分析結果から授業改善の方策を練る（校内研修の実施など）

小学5年生・中学2年生のRST受検

7・8月

結果分析から授業改善へ

- ・「全教員」が、結果を読み解く
- ・「全教員」が、「分析の視点」に基づいて結果分析を行う
- ・「全教員」で、分析結果から授業改善の方策を練る（校内研修の実施など）

（教職員RSTの体験）

9月

大阪府チャレンジテスト（中3）

チャレンジテストの分析については、学調分析の流れを参考に子どもの実態把握を行い、授業改善に生かす

問題分析から授業改善へ

RSの視点からの授業改善へ

10~12月

結果分析から授業改善へ

RSについての学習会や
自律した学習者の育成に向けた
授業づくり研修 等

1・2月

大阪府チャレンジテスト（中1・中2）

問題分析から授業改善へ

実践交流

結果分析から授業改善へ

3月

各学校、今年度の取組み総括及び次年度に向けた計画

1. 学力・学習状況調査等の「問題・結果」分析から授業改善へ

全国学力・学習状況調査等の調査問題については、学習指導要領が求める、資質・能力を踏まえ、それを教育委員会や学校に対して、具体的なメッセージとして示されているため、授業改善にとっても有用であるとされています。

問題分析の視点

「題材」に着目する

・教科の枠を超えて、授業改善につながるたくさんのヒントがある。

「構成」や「配列」に着目する

・どんな力を身に付けるのか整理し、どの順序で、どんな課題を設定するのか、単元デザインの例として活用できる。

「問い方」に着目する

・丁寧に具体的な問い方 ・1文に1つの指示や発問

「解答類型」に着目する

・誤答を予想 ・子どもたちのつまずきから指導の改善を図る。

「類似問題」に着目する

・問題の定着率を比較し、指導の在り方を再確認する。

授業改善につなげる

結果分析の視点

1. 成果と課題の洗い出し

「正答率」に着目する

・まずは、府や全国と比較する。正答率の高さから、成果と課題を見つける。

「内容や領域」「評価の観点」「問題形式」に着目する

・成果や課題が特徴的に現れてくることもある。そこに着目すると、各学校や教師のそれまでの「取り組み」や「強み」、「弱み」を知ることができる。

「無解答率」に着目する

・正答率が高くても無解答率が高い場合や、逆に正答率が低くても、無解答率も低い(子どもたちが何かしら、記述しようとしている)こともある。

「反応率」に着目する

・解答類型から「反応率」を見てみると、子どもたちの誤答の状況や躓きやすさが見えてくる。

同一集団の経年変化の「伸び」に着目する

・各学校や各学年の重点について、成果や課題を知ることができる。

2. 学校全体で課題となるような「問題」の抽出

3. 2の「問題」について、課題改善のための取組を考える

めざす子どもの姿の共有

& その実現に向けた取組みの実践

だからこそ!

学校全体で取り組むために
全教科・管理職を含めて

教職員がリーディングスキルテスト(RST)を体験する

・リーディングスキル(RS)について知るきっかけに

RSTの6分野					
係り受け解析	照応解決	同義文判定	推論	イメージ同定	具体例同定 (辞書・理数)

⇒文の意味理解は、まずその構造を正しく把握することから始まる。(係り受け解析)
 指示語が指し示す内容は、もの?場所?何かの修飾?(照応解決)
 言葉と図やグラフを対応させることは多くの子どもにとって難しい。(イメージ同定)
 課題(説明)に沿って自分の考えを持つことも同様。(具体例同定・推論・同義文判定)



(参考)
 教育のための科学研究所
 「設問の特徴と例題」
<https://www.s4e.jp/example>

・固定観念の解消に

⇒「読めばわかるはず!」「言ったら伝わるはず!」から「全員に伝わったかな?」へ

そして

リーディングスキルの視点からの授業改善へ

・的確な声掛けに

⇒「ここ」「それ」等の指示語の使いどころを意識する。
 「工夫して書こう」「〇〇について話し合おう」等の曖昧な表現を減らす。
 子どもに早く簡単に正確に伝えるためには?という視点を持つ。

・「指導の個別化」の充実に

⇒文章等の読み取りや説明の理解が難しい、児童生徒・場面を教師が把握する。
 指導と評価の一体化をさらに充実させる。

つまり、「関係のない教科はない」ということ

事前研修

「そもそも
RSって?」

RST
体験

事後研修

「RSTを体験して」
「RSの視点からの
授業改善とは」

分野別
学習会

実践交流

◎今後のビジョン

知る

試す

磨く

R6年度

教職員
各校15名受検

R7年度

各校 教職員約15名
中学生受検

R8年度

各校 教職員約15名
小・中学生受検

学力向上プラン策定委員会通信ビデオ

学力向上プランの策定にあたっては、各校の授業づくり担当等の先生方の協力のもと、ブレストや周知方法についての協議を重ね、全教職員の皆さんにもアンケートの形でご協力いただきました。

各校の主体性を尊重しつつ、指針となるものをめざし、プランも通信もアップデートしていきます。



プラン策定の過程やその運用についての説明はこちら↓

https://drive.google.com/drive/folders/19S58e4W_FufGE5ofvtPmTpEsw3HhQ56V?usp=drive_link

令和6年4月 施行
令和7年4月 改訂
令和8年4月 改訂

このプランは、大阪教育大学 佐々木 靖 教授の監修のもと、「泉大津市学力向上プラン策定委員会」ならびに市教職員へのアンケートを参考に作成しました。